Koroについて

杉原　方

"Koro" という言葉の起源はあきらかでない*[1]が，ジャワ人の "keruk"（収縮）マレー人の "kuru"（振え）からきているとみられ，中国では "Shook Yong"（縮陽）とよばれている。

発作性にくる症状であって，penis が体内に収縮しその結果，死に到るという強烈な不安に襲われ，それが幻想又は来るべき恐怖というよりも，非常に切迫した危機状況を呈し，現実的な種々の手段により，患者はこれより逃れようとする様がみられるのである。

Koro は西欧にみられぬ，珍しい症状をもちまたある地方（特に東南アジア）に限られて発生するものとして注目されてきた。例えば American Handbook of Psychiatry の 1959 年の初版では稀有な，分類しがたい，集合的，異国的精神病症状群*[2]の章に記載されている。そのなかで稀有な，分類されがたい症状群に Ganser 症状群，Capgras 症状群，自己視症状群，Cotard 症状群，Clerambault 症状群がみられ，続いて集合的精神病の項があり，異国的精神医学症状群の項に機能性精神医学的症状群として，Latah, Amok, Koro, Whitico, Voodoo Death があげられている。しかし 1974 年の第 2 版では稀有な，分類されがたい，集合的精神医学的症状群と異国的精神医学的症状群に章が分けられており，前者には Munchausen 症状群が追加されている。後者には Susto 及び Espanto が補われている。

稀有な症状群については M. D. Enoch らの Some Uncommon Psychiatric Syndroms (1967) という小冊子に症状，概念の変遷，文献及び自已症例についての興味ある記述がある。記載されている症状群は Capgras, Clerambault,

Othello, Ganser, Couvade, Munchausen, Gilles De La Tourette である。

さて，異国的というのは西欧文化に対して用いられているもので，原始的とか未開的という言葉の使用をさけたものにすぎない。

最近ではこれらの稀有な症状群が文化的要因により決定される点より，Culture-bound Disorders 或いは Culture-bound Syndroms という語が用いられている。しかしこれらの障害は1つの限ぎられた文化圏内にのみ発生するとはいいがたく，隣接の文化や異種の文化のあるところに同種の症状をもってあらわれる。疾病単位やわれわれのなかにみられる疾患の変種とみなすことが問題となる。しかし文化的要因のみられない疾病は特に精神医学では考えがたい点に Culture-bound という用語も問題を含んでいる。なお Devereux (1956) の示唆によると Culture-bound Disorderの症状のあらわれは文化の期待と一致するという。

Yap (1974) は Culture-bound Disorders を

(1) 恐怖反応（急性不安やパニックの非特異状態）

thanatomania（自殺マニア）

utox　台湾にみられる恐怖反応（幻覚・健忘・意識混濁）

susto

koro　　後述

(2) 憤怒反応

amok　　後述

(3) 憑依症状群や舞踏狂の様な特異なヒステリー

とわけている。

Kiev (1972) によれば

(1) 不安状態

koro

susto

(2) 強迫神経症

冷却恐怖症

神経質

(3) ヒステリー

latah

(4) 恐怖症

邪視

voodoo death

(5) うつ反応

hiwa:itch

windigo

(6) 解離状態

amok

hsich-ping

憑依

また David W. Swanson (1970) その他の "The Paranoid" では Major and Exotic Paranoid の章の Exotic Paranoid Syndromes のなかに Capgras, Cotard, Autoscopic phenomenon (自巳視現象) Clerambault, Amok, Whitico, Voodoo Death, Collective Psychoses, Susto, Puerto Rican Syndrome がみうけられ, Paranoid 妄想状態という観点よりすれば, 上記の疾病の多くが含まれている。以上の症状群に若干の説明をすると,

Ganser 症状群：1898 年, Ganser が報告した "的はずれ応答" を特長とした症状群, もうろう状態, ヒステリー傾向, 偽痴呆, 小児症がみられ, 主として拘禁状態, 戦争などの危機状態に観察され, 願望反応と目される。

Capgras 症状群：1923 年, Capgras が illusion des sosies：二重身の錯覚とてあげたものである。患者のよく知っている人が本物そっくりのにせものであって本物は別に存在するという妄想である。

自己視症状群：外から自分自身をみる幻覚であって二重身ともいう。てんか

ん，片頭痛の患者に報告されており，時にうつ病，精神分裂病にもみられる。

Cotard 症状群：1880 年，Cotard が記載した初老期の婦人がいだいた豊富な虚無妄想をいう。患者には友人，家，力が消滅し，身体，感情をなくし，世界も存在しない。時間も止り，奇妙なパラドックで患者は不死になると確信する。この症状群はうつ状態をあらわす諸種の精神病にもみられる。

Clerambault 症状群：1920 年，Clerambault の記述による恋愛妄想をいうが，かかる妄想性確信は一般に妄想状態にままみられる。この症状群の情熱性の強調のほかに，精神機構の自動性，思考反響，憑依感，被影響性を特性と考える立場もあり，症状群の単位性が問題として残っている。

Munchausen 症状群：1951 年，Asher が急性疾患のために入退院を繰返し，検査や治療のために腹部切開などを何回となくうけて病院を巡訪する患者の症状につけた名称である。Hospital Addiction 病院嗜癖ともいわれている。

この名称の由来はほら吹き男爵の旅行記の Baron Munchausen の旅行と空想がこの症状群の患者の病院廻りと作話に相似することからきている。

Othello 症状群：配偶者に対する不貞妄想で昔より文献にあらわれていたが，1955 年，Todd and Dewhurst により命名された症状群である。Othello はいうまでもなく，シェークスピアの悲劇の主人公で妻デスデモナの不貞を妄信して，妻を殺すムーア人の将軍の名前である。

Couvade 症状群：妻の妊娠や分娩中に夫が心因性にあらわす諸種の心身の障害をいう。未開社会にみられる Couvade：擬娩の儀式或いは風習から名称がつけられたのである。

Gilles De La Tourette 症状群：1885 年，Tourette が多様のチック，発語強迫，反響語を特徴とする患者を記載したことにはじまる。彼は 1899 年にこの疾患に maladie des tics compulsifs と命名した。

Collective Psychoses：西欧中世に発生した，St. Vitus の踊りとか狼つきなどがこれにあたる。

かなりの広い地方に疫病的に多発するのが特性であり，時代の経過とともに

その集団発生も急速に消退するものである。ヒステリー或いは精神分裂病の徴候がうかがわれると多くの研究者はみている。

次に Koro 以外の "Culture-bound Disorder" について若干の説明をする。

Latah：始めてマレーにて記載された症状群であるが (1883 年，O'Brien) その語源は明らかではない。latah 様の症状は世界各地でみられている。

アイヌではイム (imu)，シベリアでは myriachit，タイでは bahtschi，ビルマでは yuan，フィリピンでは mali-mali，マダガスカルでは ramenajana，マラウイ Malawi (Nyasaland) では misala，ザイールでは banga といわれ，エスキモーの pibloktok 又は pibloktoq，アメリカ・インディアンの jumping，シベリアの婦人の amurakh，エスキモーの menerik もこれに属すとみられており，サハラやアルゼンチンとチリに属する南アメリカの南端の Tierra del Fuego では特別の名前なしでこの症状が報告されている。latah は突然の恐怖により，推感性亢進，自動的従順(従命運動症状)，反響語，反響動作，汚言などの状態がでる症状群である。報告された事例には低階級の婦人が多くみられる。上述の症状の外に森に逃げこむ（アフリカ）危険な崖によじのぼる（南米）などの fugue（遁走）症状があり，その間暴力があらわれ後述の amok に似るものがある。

イムでは婦人にみられ，アイヌ人のタブーである蛇ということばを浴せられたり，脅かされると躁暴状態，反響症状，反対動作，理性制止，退行などがみられ，日頃つつしみ深いアイヌの婦人がイムになり，見知らぬ人に突然だきついたりするさまが，時にみられたという。イムの研究は内村らにより昭和 13 年頃になされ，すでに和人との接触，教育，集団生活の減少などによるアイヌ民族の稀薄化により消滅しかかっていたが，諏訪ら (1961 年) の 20 数年後の調査によるとイムの多くあった地方でも数が乏しくなり，症状も穏かな屯座性のものになっているとのことである。

明治の始め，アイヌの戸籍の作成にあたった役人がイムの人の反響語に当惑したことや金田一博士に東京へ連れてこられた，ユーカラ伝承者がイムであっ

て，或日行方不明になったが，見つけられた時は広告の人形の前に立って同じ動作を真似て繰返していたことなど遠い昔話となってしまったようである。

Amok：これもマレーにて始めて記載された症状群である。(1849 年, Oxley) amuk，running amok，ともいわれる。マレー語で Amog は荒れ狂って敵と交戦することを意味する。また meng-amok（盲の狂暴），mata gelap（暗黒の目，突然眼前が暗くなることを意味する）ともいう。Amir によると Oxley が 1849 年にこれを Monomania と考えて記載しているとこのとである。この症状群は急に発病するか，短い不機嫌についで，もうろう状態になり，傍にいる人畜を殺傷しながら突進し狂乱状態になる。捕えられるか，自殺するかの結果に終る。もし患者が冷静に復すれば健忘，或いは眼前暗黒，光幻覚，動物や悪魔の幻視の体験をのべる。latah が女に多いのに反して amok は男におこるようである。

この症状群はマレーに限らず，アフリカ，ヒリッピン，カリブ海周辺，Tierra del Fuego，などにもみられる。

amok の発生基地としてはてんかん，精神低格，精神分裂病，精神病質，症状精神病があげられ，その直接の発生動機として驚愕，憤怒，苦悶，嫉妬のように容易に且つ強く反射機制や本能機制を亢奮させる情緒作用を認める場合が少くないのではないかと考えられる。

近年 amok の発生がみられなくなっているといわれているが，J. Westermeyer は 1973 年に「アモック暴力の流行性について (On the Epidemicity of Amok Violence)」という論文においてなお amok は東南アジアで起り続けていると確認し，自巳症例 20 例とタイ，フィリピン，マレーの症例を報告している。興味あることは彼の症例 20 例中 18 例が手榴弾を用いていることと，その犠牲者が患者と異なる民族であることである。また amok の暴発は政治，経済，社会文化的激変の時期に増加するように思われ，患者は社会変動に対して対処する準備がされていないものとみられる。個人の感受性と社会文化的流動は amok をおこすに共存せねばならず，行動変容としてそれは社会に流行するも

のである。過去150年以上のすべてのamokの研究において婦人の患者のいないことは婦人が伝統的家庭中心の役割を妻や母としてとることにあるとみている。

amokの狂暴な行為の激しさは西欧人に強烈な印象をあたえたらしく，恋愛の激しさとamokのそれを照応させて，ステファン，ツヴァイクは“アモック”*3という小説を書いている。この小説はフランスで映画化もされた。

Whitico：Windigo 又は Witiko，ハドソン湾地域に住むエスキモー，特にCree Eskimosや，Ojibwa やSalteaux インディアンにみられる特異な憑依状態である。

無食欲，嘔気，嘔吐，下痢に始まり，Whiticoになるのではないかとくよくよ考えこみ，恐怖するようになる。Whiticoとは人間を食べる伝説上の氷でできた巨人である。患者はやがて引きこもり勝ちになり，悲歎にくれ，不眠，極度におびえ，終にはWhiticoになったという妄想をもつにいたる，即ち人を殺し食べる人喰いになったのであると確信する。

これは特異な，文化に限定された妄想状態とみなされる。

しかし原始的なヒステリー現象とする人もある。依存要求の挫折が退行的に喰人衝動をおこすとされる。

Voodoo Death：タブーに反したり，呪われたり人が何の身体的障害もなしに事実死亡することがオーストラリア，ハイチ，南アメリカ，中部アメリカ，ニューギニヤその他の地方でみられる。voodoo 教が人を呪い殺す力があるという信仰より，これらを voodoo death 又は thanatomania という。

死亡した人の検査では器質性の損傷が発見されず，血管運動神経麻痺の症状がみられたにすぎない。この原因についてショックの致死性の遅延状態をおこすアドレナリンの分泌増加や迷走神経の刺激過剰が考えられている。

Susto：中南米にみられる症状で，子供，若年者にみられる。はげしい恐怖体験後，不安，亢奮，よくうつ，体重減量をみる。そして患者は自分の魂が地面にすいとられ，体のなかにはもはや存しないという妄想をもつ症状である。

ある地方では espanto と susto を交換して用いられ，又別の所では重い事例に espanto が用いられる。Cotard が魂があって身体がなくなるという妄想に反し，Susto は身体があって魂がなくなるという妄想である。

Frigophobia (pa-leng)＝Angst vor Kälte：伝統的中国医学にみられる症状である。陽と陰の不均衡から来る生のエネルギーの喪失によるとされる。急激に発生するものでなく，慢性の経過をとる。不安が一定の器管に限定されず，寒冷の影響に心をくばり，厚着や重ね着をする強迫現象とみられる。

神経質：森田療法で広く世界に聞えた森田正馬の神経質のことであって，Kiev は不安感，強迫症状，心気感，対人恐怖にその特性があるとし，西欧の強迫神経症の日本版と考えて分類のなかにいれている。しかし“神経質”を Culture-bound Disorders のなかで言うのはあまり他ではみうけぬことであり，やや奇異な感がしないでもない。

邪視 (evil eye) 他人を不幸におとしいれる目ともいえるもので，その目ににらまれると不幸が訪れる。この目をもっている人は定まっているが，誰がそうであるかは直にはわからない。この信念又は言いつたえは西欧，印度，日本にもみられる。邪視からのがれるためまずしい姿に子供をさせる（印度）とか邪視の目をごまかす道具に「ざる」が用いられる（日本)。

Culture-bound Disorder に関する最近の報告は僅かである。amok，koro，latah，susto に限り，過去 10 年の yearbook of psychiatry and applied mental health とpsychological abstracts を調べてみた。yearbook には前述の J. Westermeyer のamok についての 1 篇のみであり，abstracts には J. W. Connor の latah，susto，imu，amok を精神分裂病様反応とみて，これの理解への社会的接近を論じたものと C. W. ONell のSusto の 24 症例の分析の 2 篇にすぎなかった。前述の Yap や Kiev その他の単行本には記述がみられるものの症例報告などは多いとはいえないであろう。

Koro の研究史

Koro はセレベスの Buginese 族では収縮を意味する。1874 年，Matthes が

Buginese 語の辞書に "Lasa Koro" として記載したのが疾病として Koro の名称があがった最初のものである。そのなかで "土着人のなかでは稀れなものでなく，非常に危険とみるべき疾病…" と述べている。

Hatte Blonk が 1895 年に，Van Brero が 1896 年に Koro の臨床例を記述じた。特に後者は南セレベスで記載された諸事例をもとにして，この症状群の精神病理を考察し，強迫現象の特殊な表現とみた。

Voustman は 1897 年に自己の症例の研究を発表している。

しかし，1934 年の Van Wulfften Palthe の総合的な病像の記載，古代中国医学思想よりの原因論，人類学的考察など，後の研究に寄与するところが大きく，Linton その他は彼の研究を引用している。又 Van Wulfften Palthe は女性の Koro の記載をなし，Koro は不安神経症の異型と断じた。

Solt は 1934 年，マカッサルの 1 村にみられた 6 人の住民の同時発生を報告し，Koro の流行性を論じている。

Kobler は 1948 年，南支那の 1 例につき精神分析的考察より急性去勢恐怖とした。

Devereux は 1954 年，やはり精神分析の側から性器切断の神経症性空想と Koro を関係づけ，広く分布されている関連の信念や慣習を指摘し，また西欧人にみられた Koro 空想の症例をあげた。

Linton は著明な文化人類学者であるが，彼の 1956 年刊行した "文化と精神症害" ("Culture and Mental Disorders") の "神経症と神精病に及ぼす文化の影響" と題する章の原始的精神病の例として Koro と Whitico をあげた。彼は Van Wulfften Palthe の論文を要約し，Koro に現実との接触の喪失をみて，神経症よりむしろ精神病としている。

Baasher はスーダンの症例（1963 年）をあげ，1963 年，Joint Japanese-American Psychiatric Society（東京）では Yap と Rin がそれぞれ Koro を討論した。

Yap は 1965 年，ホンコンの 19 例の自己症例をもとに culture-bound の離人

症で非定型の心因性精神病とした。

Rin. H（1963）は台湾の3例，Gwee, Ah-Leng（1963）はシンガポールの3例，Lo, W. H.（1967）はホンコンの2症例を報告した。

その他 Pfeiffer（1967，1971），Kiev（1972）Yap（1974）らはそれぞれ，文化と精神医学に関する単行本のなかで Koro を論じている。

また Yap によると西欧の Koro 或いは Koro 様の症状群は Kraepelin（うつ状態にみられた心気妄想）（1921），Schilder（1950）（身体図式障害の2例），Bychowski (1952)（うつ状態のアメリカ人）の諸家の研究のなかにみられるという。

Koro の発生地と発病数

Koro の名称がつけられたセレベスをはじめとする東南アジアとホンコンなどの南シナ又は台湾が発病地である。まれにスーダンや西欧の事例の報告がある。患者はその土着の人か或いは中国より渡来した人々である。

また Pfeiffer によると，Müch. F. はジャカルタ在住の西欧人に相当数の病状をみているという。

日本や朝鮮で事例の報告はないようである。一般に発病数は少いと思われる。例えば Yap はホンコンに於ける15年以上の経験で19例を観察したにすぎないし，Pfeiffer がインドネシアで報告を求めた40人の医師のうち，5例が観察されているのみである（但し，1例は女子）。しかし Solt の報告の如く流行性にも発生する場合があるので発病数の把握はむずかしい。更に Koro の患者や家族は発病の場合，西欧医学の専門医に頼らず，伝統的治療法をとったり，漢法医や民間治療師，呪師，メディシンマン，などにゆだねる場合がかなりあるとみられ，真の発病率は多いのかも知れない。

さきに日本に於ける症例報告はないとしたが，筆者の阪大神経科での約20年間の外来診察にはみられず，入院患者にもなかったようである。ただ女子の1例で，急性の不安，困惑状態で，性器の喪失の訴えに近いことをいいつづけていた患者に外来診察で遭遇したことがある。患者は肥満型のやや知能の低格さ

が疑われる中年の女性であった。外来には1回しか来訪をみず，調査も出来ず，結論には到らなかったが，Koro 様症状であったと現在も考えている。

Yap の15年以上の間ホンコンで観察した典型の Koro 19例についてみてみたい。症状としての Koro は精神分裂病，進行麻痺，ヘロインの禁断症状を基にするもので6例あるがここから除かれている。

年齢は16－45歳，既婚，9，独身，8，離別，1，未亡人，1，である。

1例以外は労働階級，不就学，2，初等教育，14，1例のみ高等教育をうける。

いずれも精神障害者を家族に持っていない。

既往歴のうち目につくのは14歳時に短期間の精神障害をみた1例とそううつ病の1例，2例の性病罹患のみである。

性格型としては，受動－依存型，11，強迫型，4，情緒不安定型，3，受動－攻撃型，1としており，愚鈍，内気，我(が)をはらない神経質な性格を一般的印象としてうけている。

Peiffer も精神的分化遅滞，自己不確実型を認めている。また Rin. H. が家族構造に父親像の欠損又は弱体がみられると述べたこともつけ加えておく。

性に関する記録からみると，Yap 例は殆ど性についての葛藤や不適応がみられるといえる。13例は性的欲求の不充足にあり，既婚者もその配偶者の非協力，別居，家族の増加に対する恐怖に悩まされている。その他一般に性的不能，結婚恐怖，自慰などの問題があり，2例に過剰行為の既往歴がある。僅に2例が一応障害がないとされている。しかし全体として性的未熟で自己の男性としての力に自信を欠いでいるとしている。これは大方の研究者でも一致してみられる所見である。

発病年齢(初発)は Yap 例では16～42歳であって，21歳以下は3例，21～31歳は7例，31～40歳は8例，41～50歳は1例となっている。

発病回数は3人が3回，6人が3回以上であった。

症状，罹患期間は数時間であり，短いのは1時間半，長いのは2日間に及ぶ

としている。

Pfeiffer は一般に1時間，短いのは30分，長いのは2日間としている。

発病時の状態は Yap 例では，不安，弱体，亢奮，心気的念慮，をもつ神経質気分であり， Pfeiffer は慢性神経衰弱状態にあるとする。

また Yap は結核，潰瘍，VB 欠乏をそれぞれ1例づつみている。

発病時は多くは夜である。

促進の原因とみられるものは個人的で多様である。性に関するもの，Koro で死んだという話又は Koro についての論義を聞いたこと，冷気，冷水に身をさらす機会に遭遇したこと，驚愕したことなどがみられている。

急性で重症の場合は急性不安，恐慌，意識喪失，もうろう，死の切迫感を伴う。多くは動悸，時には突然の冷汗，息づまり，胸部の不快感，ふるえ，めまい，おくび，などがみられる。その他僅に下痢，知覚鈍麻もある。なかには環境の圧迫による，よくうつ状態や被害妄想に及ぶ発展もみられる。いづれにせよ Koro の中心症状は penis の収縮，それの結果生ずる死に対する不安である。

伝統的民間療法について Van Wulfften Palthe は Liechtenstein, A. の A Clinical Textbook of Tropical Medicine のなかの“熱帯地方の精神医学と神経病学”の章で，挿絵をそえて記述している。

陰と陽の不均衡から Koro が生ずるという古代支那医学の考えから陽をおぎなうため，陽をあらわすもの，即ち，火薬，硫黄，錫，その他の薬草が処方される。

もう一方では，死をもたらす，腹中への penis の埋没を機械的に防ぐ方法がとられる。緊急の場合には，飾り職人や薬種商が使用している秤をいれてある箱が用いられ，それに固く保持される。あるいは副木のように小さい木を用いることもある。これには多分に呪術的な意味もあるとのことである。その他友人，家族が保持したり，吸引したりして発作の鎮静をまつ場合がある。

治療：Yap は精神療法と精神安定剤の併用を用いている。3例についてはインシュリン或いは電気ショック療法を施行し，うち2例は入院している。

追跡調査：彼は9例について調査することが出来たが，その結果3例が完全に治癒し，4例は発作こそないが不安を残し，1例は軽度の発作があり，1例は未治と述べている。追跡までの期間は1年9ケ月～9年である。

予後：Yap は病前性格，疾病期間，発作回数，性生活がこれにかかわって来ると考えているが，少い症例からの結論のため，一般にいうには自信がないと謙遜してのべている。

疾病分類

精神病と神経症の差を社会的位置のとり得る状態にみている Linton は Van Wulfften Palthe が Koro を神経症の範疇でとらえたことに反して敢えて，精神病のレッテルを貼る方に傾くと述べている。しかし大方の研究者は Koro を神経症のうちで考察している。

Yap によれば Koro の患者に，性衝動についての罪や恐怖のため，正常には性と連合している知覚，印象像，感情などのまじりあったものの運動性および触覚感覚の成分が自我から解離することが認められるとする。この解離により身体精神の離人症が生じ，感情成因性の歪みをおこす。しかし Koro 患者は妄想というより強い民俗上の信念に支えられた確信によって，現実との接触は失しなわず，部分的な離人症にとどまる。又，患者の病識は完全なものではなく，その症状は二次性利得とも結びつかない。

Koro には遠因，近因の要因が認められ，心因性であり，十分その成立に了解が得ることができる。

Koro は文化的背景との密接な関連をもち，“Culture-bounded” である。

故に Koro は Culture-bounded の心因性精神障害で，Culture-bounded 離人症状群であると Yap（1965）は述べている。

更に Yap は血管迷走神経発作，卒倒，意識喪失，狭心症，冠状血管血栓，寡血糖，局在性身体感覚の歪みをもつ，てんかん状態，などとの鑑別診断をとりあげている。

Lo(1967) は強迫神経症 88 例の追跡調査の報告で，強迫観念および強迫行為，

恐怖症－反芻，非定型強迫に分けているが，Koro 症状を有す 2 症例があると記すのみでどのなかに属しているのか明らかでなく，詳細な症例もあげていない。だから Koro を強迫神経症の範疇でみているのか，Koro のみの症例なのか，或いは他の症状とともに Koro 症状があったのか不明である。

Meth (1974) は American Handbook of Psychiatry で Koro を exotic psychiatric syndromes のなかにいれ，こまかい疾病分類を考察していない。しかし Yap の "culture-bounded reactive syndromes", Weidman and Sussex の "culture-bounded responses to culturally patterned stresses", Enoch et al の "some unknown psychiatric syndromes" を記載している。

また Koro についてニューギニアの東高地の限局された地域で観察されたビールス性の中枢神経系疾患とまちがえてはいけないと述べている。この疾患は "Koro" 又は "Kuru" とよばれているからである。

Pfeiffer (1967) は Koro を心気症状群にいれて考察し，所謂心臓恐怖症と比較し，精神衰弱人格或いは神経症の発展の経過中にあらわれ限定された，うつ性気分のうちにあるとする。

又 1971 年には恐怖症と強迫症状群の章のなかの心気症－恐怖症症状群の西欧医学体系外の特別の文化性形成として同様の事項を論じている。

Van Wulfften Palthe (1934) は性器から二次的に生じる死に対する不安発作と考えている。

病因：

南方によくみられるマラリヤ，トリパノソーマなどの寄生虫による疾患，また梅毒による疾患，ペラグラのような栄養障害による疾患，幻覚発現剤のような精神病様症状をおこす物質の使用または物質を含んだものの服用，その他器質性の病因は否定されている。

心因性精神障害あるいは神経症と考えている研究者は多い。Yap は揚子江下流と南シナに限られて発生するものとみて，東南アジアの華僑にまず発病するもので，東南アジアの住民にはまれにおこるものとみているようである。しか

し Bychowski (1952) のよくうつの中年のアメリカ人症例，Schilder (1950) の身体図式障害の2症例，Kraepelin (1921) のうつ状態の心気妄想中にあらわれた，そううつ病の1症例を研究した結果，Koro はどこにでもおこり，陥没の恐怖と急性不安の間に一般にみられる死の恐怖が存在することを Yap は認めている。しかしこの症例が何故シナの住民に限られるかについては性の生理(或いは病理）に関する伝統的中国の理念に基づくとしている。陰と陽の不均衡が死をまぬがれぬ疾病となる。また伝統的中国医学は過剰性行動と結びついた sun-k'uai といわれる一種の神経衰弱状態を認めており，この疾患の症状はめまい，心身の衰弱であると考えられていることを述べ，Koro 発生に於ける文化の期待の要素の重要性を強調している。

Van Wulfften Palthe も陰陽の中国医学の原理を理解し，penis の陥没が死を意味する集合的空想が不安神経症をおこす。不安と強迫衝動の絶えざる侵襲をうけ，死の恐怖が生じ，陥没の恐怖に集中すると述べている。更に去勢葛藤と Koro の関係，生の破壊を意味するものとして自殺手段に性器の破壊がつかわれること（例えば，精神分裂病の退行症状）をあげている。

Koro はかつて Exotic Psychiatric Disorders の名称のもとに amok, latah, witico などと共にあつめられていた。またその疾患名もその地方の呼名をそのまま使用し，いかにも exotic であるという点が強調された。そのため，いわゆる未開社会に特有の疾患，或いは低い文化社会にみられる現象であるかの感をいだかしめた。しかし，現今，進化論的思潮も消散し，culture-bound という考え方でとらえられて，Koro はその名称のはじまりの地方にこだわらないで中国の南部，東南アジアの中国人によくみられ，現地の住民にもある疾患とされる。

Yap などは中国人に発生した症例の研究より Koro は伝統的，古代中国医学の思想が背後にあって生ずとしている点より憶測すれば，Koro はもともと中国人の疾患であったようにとれる。

どの疾患に限らず，何時，何処で，最初に発生したか判定するのは困難であ

る。特に精神疾患の場合は，感染疾患より更にむずかしいと考えられる。けれども Koro の原発地は何処であるかにより，古代中国医学思想の影響の度合いが，かなりの差を Koro の発病にあたえると思われる。

宮刑，宦官などの存在が Koro の病因と関係するかどうかも一考を要する。Palthe がわずかにふれているようであるが，60%以上の死亡率のあったといわれる古代エジプトの去勢手術は Koro の死の恐怖を裏づけるかも知れないが，1870 年代の中国では英人ステントによれば，あまり死亡者はなかったようである。また去勢手術による特別な人間の創生は紀元前 6 世紀あたりで，おそらくオリエント古代の専制君主制の成立とともに起こったものと考えられている。宦官として中国に残ったものの去勢手術はなにも中国特有とはいえない。さらに割礼を考えるなら，この慣習と Koro 発生の関係も考察しなければならないであろう。

陰と陽の古代中国医学の原理が問題となるならば，何故中国全土に Koro の発生をみないのかという疑問が生じる。 Yap は彼への個人的報告で北京には Koro がないということを記述している。

筆者は Koro が心因性であることに反対するものではなく，その急性の不安発作，死の恐怖は重要な指標となる症状であることを認めるのにやぶさかでないが，Koro の背後にある強い確信を強調したい。この確信は妄想にみられる欲求性の病的確信に近く，witico の如く俗信即妄想と表われないが，voodoo death にみられるように，二次的に強く病状形成に作用するものである。この確信こそが俗信，タブー，呪術などを支え，その文化と不可分にあって文化自体を成立せしめているものと思われる。

さて A. H. Leighton (1969) はナイジェリアの Yoruba の間の精神病の原因を次の如き順位であるとしている。一番上位にある原因は魔術的，超自然的悪性の影響，次いで薬，毒，遺伝，接触，それに自己の運命を汚がすような行為を犯すこととなっている。心身の外傷も含んで考えられているものの，それらは稀な重要ならざるものとされている。

このように，魔術は現在でも重視され，いろいろの文化圏や地方において呪術が生きており，西欧医学の代りに呪術による医療が施行されていることは周知の事実である。

さて，ここで魔術によって Koro が生じるという俗信が存在するか，或いはかつてあったのか調べてみたのであるが，中国，東南アジアの諸地方にはみあたらないようである。ところが Koro がないとされている日本に次のような説話が残っている。即ち，今昔物語巻第 20，陽成院御代滝口，行金使語第 10，と宇治拾遺物語，106 滝口道則習術事巻 9 の 1 *4，である。この説話は同源のものとみられ，道範と道則と主人公の名前に違いがあるが，殆ど同じ話である。

陽成院の御代，禁中警護の士が公務により東北に行く途中，信濃国のある郡司の家に宿り，郎等ともども司の術によって性器の消失をうける。翌朝，出立後暫くしてもどしてもらうのであるが，道範は術をつかわれたと知り，司に術を習らいたいと乞う。司は公務をおえた帰路に教えることを約束するが，その帰りにこの術を習うまでのテスト*5に失敗して，道則はつまらぬものを生きものにするような下級の術を習ってもどるのである。

ここには Koro にみられる急性の強度の不安状態はみられず，切迫してくる死の恐怖もない。しかし術による消失というものは存在している。この場合，魔術以外の外力でこのような結果が生じているのではない。また何かのたたりのためというのでもない。(小林一茶は“おらが春”のなかで，蛇のつるみたのを打殺したものが，性器の痛みとくさり落ちで死亡し，その子が不能となった話にこの物語りを思いあわせている。)

この術は司も他人より伝えられたようであり，また道範の習ったものは陽成院にも習得されたが，今昔物語では仏教の立場より，かかる外法をもてあそぶことを戒めている。

この説話の源はどうも見出されないようである*6。中国の怪奇神仙の物語りにもないようであるし，仏教の法でもなく，天狗や飯綱の法の系統であるかもしれない。

この説話の源と Koro の発生基盤とは何らかの形で関連があるものと思い敢えて，空想にわたるかも知れぬ考えを述べた。

おわりに

文化結合の精神障害といわれる Koro について他の文化結合の精神障害との関係を考察し，臨床形態については Yap の報告に主として基づいて記述した。更に Koro の発生とみられる文化圏にあったと想像される魔術の存在が日本に於いて説話として残ったのではないかという仮説を述べた。

文　献

1）S. Arieti and Y. M. Meth, Rare, Unclassifiable, Collective and Exotic Psychotic Syndromes, American Handbook of Psychiatry (Ed. S. Arieti) Basic Books, Inc. New York, (1959).

2）John W Connor, "A Social Approach to an Understanding of Schizophrenic-like Reactions" *Int. J. Soc. Psychiat*. Vol. 16, (1970), 136－152.

3）江川昌一，杉原方，細谷純之助．"いんどねしやの精神病 Amok に就いて，" 大阪医事新誌 14 巻，3 号，(昭和 18 年)．

4）M. D. Enoch. W. H. Trethowan and J. C. Barker, Some Uncommon Psychiatric Syndromes. Tohn Wright & Sons LTD. Bristol, (1967).

5）G. Devereux, Normal and abnormal : The key problem of psychiatric anthropology, Some uses of anthropology : Theoretical and applied. (Eds. J. B. Casagrande and T. Gladwin). Anthropological Society of Washington, Washington, D. C. (1956).

6）堀見太郎，江川昌一，杉原方．"南方熱帯圏に於ける精神病"，大阪医事新誌，13 巻，9 号，(昭和 17 年)．

7）A. Kiev, Transcultural Psychiatry, Free Press, New York, (1972).

8）E. Kraepelin, Manic-depressive Insanity and Paranoid, Livingstone, Edin burgh, (1921).

9）A. H. Leighton, Cultural Relativity and Identification of Psychiatric Disorders in Mental Helth Research in Asia and Pacific, East-West Center Press, Honolulu, (1969).

10）R. Linton, Culture and Mental Disorders, Charles C. Thomas, Springfield, Illinois, (1956).

11）W. H. Lo, "A Follow-up Study of Obsessional Neurotics in Hong Kong

Chinese," *Brit. J. Psychiat.* Vol. 113 823−832, (1967).

12) Y. M. Meth, Exotic Psychiatric Syndromes, American Handbook of Psychiatry (Eds. S. Arieti and E. B. Brody.) Basic Books Inc. New York, (1974).

13) 三田村泰助，宦官，中公新書，(昭和 38 年)．

14) 西田博文，現代精神医学大系，6 巻，A．神経症と心因反応 I，6．文化的，社会的背景 165−166，中山書店，(1978)．

15) 荻野恒一，文化精神医学入門，星和書店，(1976)．

16) Carl W. O'Nell, "An Investigation of Reported "fright" as a Factor in the Etiology of Susto, "Magical fright." *Ethos* Vol, 3, 41−63 (1975).

17) W. M. Pfeiffer, Psychiatrische Besonderheiten in Indonesien. Beiträge zur vergleichenden Psychiatrie, (Ed. J. Klaesi) 102−142 : (1967).

18) 〃 , Transkulturelle Psychiatrie, Georg Thieme Verlag, Stuttgart, (1971).

19) H. Rin. "A Study of the Aetiology of Koro in Respect to the Chinese Concept of Illness, *Int. J. Soc. Psychiat.* 11, 7−14, (1965).

20) J. J. Schwab and M. E. Schwab, Sociocultural Roots in Mental Health, Plenum Book Company, New York and London, (1978).

21) P. Schilder, The Image and Appearance of Human Body, Kefan Paul, London (1935).

22) J. A. Slot, "Koro in central Celebes." *Geneesk. Tijdschr. Ned-Ind.* 75, 811, (1934).

23) D. W. Swanson, P. J. Bohnert and J. A. Smith, The Paranoid, Little, Brown and Camp., Baston, (1970).

24) J. Westermeyer, "On the Epidemicity of Amok Violence," *Arch. Gen. Psychiat.* 28, 873−876, (1973).

25) B. B. Wolman, (Ed) International Encyclopedia of Psychiatry, Psychology, Psychoanalysis and Neurology, IX, 420−422. Aesculapius Publishers Inc. New York, (1977).

26) P. M. Van Wulftten Palthe, Chapter on Neuro-psychiatry in A Clinical Textbook of Tropical Medicine (Ed. A. Lichtenstein) Batavia, (1936).

27) P. M. Yap, "Koro-A Culture-bound Depersonalization syndrome", *Brit. J. Psychiat.* I I I, 43−50, (1965).

28) ———, Comparative Psychiatry, M. P. Lau and A. B. Stokes (Eds) Univ. Toronto Press, Toronto, (1974).

Koro について

＊1 American Handbook of Psychiatry Vol. 3, J. M. Meth : Exotic Psychiatric Syndrome.

＊2 rare, unclassifiable, collective and exotic psychiatric syndromes.

＊3 ツヴァイク全集1　みすず書房，昭和36年（辻，関，内垣 訳）

＊4 この説話を小説としたものに小田仁二郎「風流仁」文芸日本，昭和28年11月号，坪田譲治「道則妖術を習うこと」小説新潮昭和35年5月号がある。

＊5 芥川竜之助“杜子春”につかわれている。

＊6 南方熊楠「今昔物語の研究」にも触れられていない。氏の最もとりあげていそうな話題であるが，（南方熊楠全集巻2，南方隨筆，昭和46年，平凡社）。